2017年
8月9日(水)
第10号

ナガサキ ピース・タイムズ

NAGASAKI PEACE TIMES

非核協 おやこ記者新聞

発行者【THE PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
（にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい）
〒852-8117 長崎県長崎市平野町7番8号
長崎市役所 平和推進課内
電話:095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail:info@nucfreejapan.com
ホームページ:http://www.nucfreejapan.com

被爆72周年、平和のバトンを長崎から次の世代へ

～未来の家族へ残したい平和のピース～

2017(平成29)年8月9日。長崎は被爆72周年を迎えました。
今年は「被爆72周年、平和のバトンを長崎から次の世代へ」をメインテーマとして、
親子記者18組36名が長崎の平和継承活動を取材しました。【編集部】

平和の第一歩は隣人への尊重から

―拡がる非核宣言―

世界で最初に、非核兵器地帯であることを宣言したマンチェスター市のロードメイヤーであるニューマンさんに取材しました。

ニューマンさんは、広島・長崎に落とされた原爆は破壊と悲しみしか生まないと考え、宣言したそうです。

そして、約130カ国の人々が住んでいるマンチェスター市では、平和に対する色々な取り組みを行っています。人種や宗教や言葉が異なっていても、お互いに尊重し合うことが大切だとおっしゃっていました。

ぼくは、他の国が核兵器を作っている中で、マンチェスター市だけ非核宣言をしたことはとても勇気があり、すごいと思いました。また、世界中のどんな人でも尊重することが大事だと分かりました。

[記事執筆:猪内親子記者]
[同行取材:仲埜親子記者]

平和に対する若者の考え

―一歩をふみ出す―

ぼくが出席した第9回平和首長会議総会は4年に一度、広島と長崎で交互に行われています。今回は長崎で行われ、34カ国170団体約320名が参加しました。9日の会議は、初となる若者中心の会議となりました。

テーマは「若者の役割」で、国内外6市長と広島、長崎などの学生らが6グループに分かれ、討論を行いました。討論の内容は、主に若者が主体のイベントを企画したり、平和教育に力を入れるなどの案が出ていました。

カメルーンのフォンゴ・トンゴ市のグループの意見で「自分達の一歩が平和への一歩だという意識」という言葉が印象に強く残りました。私達にできることは、この活動を理解・協力し、私達も平和への一歩をふみ出すことだと思います。

[記事執筆:山田親子記者]
[同行取材:手島親子記者]

世界平和を長崎から
―平和祈念式典に参列して―

「平和への誓い」を述べた深堀好敏さん

ぼくは、初めて長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。式典は、被爆者の方の合唱で開会しました。長崎の東西南北の水を使用した献水と、日本や世界各国の人びとの献花で犠牲者の冥福を祈りました。長崎に原爆が落とされた午前11時2分に、参加者全員で黙とうを捧げました。

田上富久長崎市長の「長崎平和宣言」では、「核兵器禁止条約の交渉会議にさえ参加しない姿勢を、被爆地は到底理解できません」と政府の姿勢を批判しました。

今、世界には約1万5千発の核爆弾が存在し、それを今後どうするかが、ぼくは本当に大きな問題だと思いました。

会場には多くの大学生や高校生が参列していました。ぼくがインタビューしたかたが「核兵器根絶を願い、核兵器禁止条約へ署名してほしい」と答えていました。ぼくも同じで、本当に核兵器のない世界になれるように平和の大切さを広めたいです。

［記事執筆：山根親子記者］
［同行取材：梁澤親子記者］

72年目の平和祈念式典

ピース・プロセスが鍵
―互いを知り理解することの大切さ―

クリスチャン・シューヒャルト市長

平和首長会議総会に出席された、ドイツのヴュルツブルク市長、クリスチャン・シューヒャルトさんにインタビューしました。

ドイツでも核をなくす取り組みをしており、世界中に発信しています。市長は、平和を築くまでの過程「ピース・プロセス」の大切さを、スポーツに例えて話してくれました。

スポーツでは、ゲームや試合を通して、お互いを知り、理解することができ、ゲーム後も勝ち負けに関わらず、仲を深めることができます。

平和を目指す上でも同じことが言えます。いろいろな国と交流し、お互いを知ることが、平和につながっていくということです。

ぼくは、市長の「正しいと信じていることを一生懸命頑張りなさい」という言葉が印象に残りました。これから強い気持ちを持って、平和の大切さを伝えていきたいです。

［記事執筆：山崎親子記者］
［同行取材：小出親子記者］

市長から言葉をいただきました

戦争のない世界を目指して
―心で感じる平和教育を―

中満泉さん

日本人の女性として、初めて国連の軍縮担当上級代表に任命された中満泉さんを取材しました。

中満さんは、小学校の時に、広島と長崎を訪れ、その時に見た子どもが被ばくした写真にしょうげきを受けたそうです。

また、高校生の時にマザー・テレサのビデオを見て、人のため世の中のためになる仕事をしたいと思い、大学時代のアメリカ留学で、国際関係の仕事に興味を持ったそうです。

中満さんは平和教育には、「心で感じることが大切だ」とおっしゃっていました。

ぼくは、長崎を訪れて体験したことを少しずつでも伝えていきたいと思います。

［記事執筆：仲埜親子記者］
［同行取材：猪内親子記者］

平和教育について語る中満さん

平和になるために折った折り鶴

―長崎県防空本部跡（立山防空壕）をたずねて―

長崎県防空本部跡

ぼくは、長崎県防空本部跡（立山防空壕）へ行き、長崎市シルバー人材センター会員の鶴田志郎さんに話を聞きました。ここは戦争中、県の防空の中心的役わりをになっていたそうです。中のかべには、防空監視隊本部で働いていた女学生の証言がかかれていました。

防空壕は、土でできているとぼくは思っていたけれど、コンクリートでできていて広かったので、おどろきました。

防空壕には折り鶴がありました。これは証言をした女学生が持ってきて飾ったと聞きました。最初はなんで持ってきたのかわからなかったけれど、今は、みんながなくなったことを知って悲しい気持ちになったから、平和になるために折り鶴を持ってきてくれたのだと思いました。

［記事執筆：小出親子記者］
［同行取材：山崎親子記者］

防空壕の折り鶴

未来に残したい長崎原爆遺跡

―爆心地と城山国民学校を訪ねて―

平和案内人の小畑俊夫さんの案内で、原爆落下中心地から城山国民学校平和祈念館に行き、当時の資料を見学しました。

原爆落下中心地付近では、被爆当時の地層の中に家のかわらや、とけたガラスがうまっていました。防空壕に避難していた9才の少女を除き、全員が即死したそうです。

また、城山国民学校では教職員31人中28人が、児童1500人のうち1400人余りが家庭で亡くなったそうです。

私と同じくらいの子が一瞬にして命をうばわれたことを知り、大変心をいためました。長崎原爆遺跡を未来に残し語りついでいくために、身近な人に伝えていこうと思いました。

［記事執筆：田口親子記者］
［同行取材：本田親子記者］

小畑俊夫さん

城山国民学校平和祈念館

次の世代へ語り継ぐ原爆資料館

―平和案内人の話を聞いて―

長崎原爆資料館で、平和案内人の馬込光弘さんに、原爆のむごさや、核兵器のおそろしさについて、お話を聞きました。

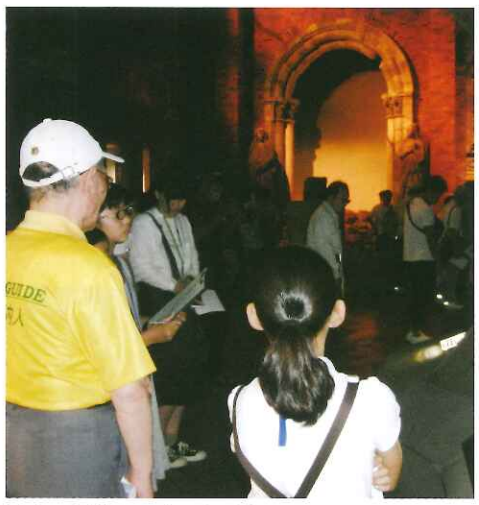
昭和20年8月9日、午前11時2分に、広島に続いて2発目の原子爆弾が長崎に落とされました。当初は小倉に落とす予定が、その日は雲が多くかわり、長崎に変更されたそうです。

私は広島に住んでいるので、広島の原爆資料館とのちがいで初めて知ったことがたくさんありました。広島に落とされた爆弾よりも威力が強いことを知りました。その中でも特に、ガラスのびんと人間の骨がくっついているものを見て、びっくりしました。

馬込さんが、若い人達に一生けん命平和のことを訴えている姿を見て、私達の世代がしっかりと受け止めていきたいと思いました。

［記事執筆：濱浪親子記者］
［同行取材：三浦親子記者］

平和案内人の馬込光弘さん


浦上天主堂のレプリカの前で

語り部・松尾幸子さんのお話を聞いて

―原爆は恐ろしいもの―

松尾幸子さん

松尾幸子さんに被爆体験のお話を伺いました。当時11才だった松尾さんは、避難先の山小屋で被爆しました。

「ピカッと光る物を見てから、あっと言う間に地上に黒いものが一面に、広がっていた。家の様子が気になり山を下りた後、空襲に備えて、防空壕を目指すことにした。熱い灰の上を歩く道中、なんとも言えない匂いが漂っていた。その匂いは、いろんな所で焼かれている遺体の匂いだった」

教科書や本でしか、原爆のことを知りませんでしたが、今回の親子記者の体験を通じて、被爆したかたから直接話を聞くことができ、原爆というものはとても恐ろしいと思いました。

［記事執筆：梁澤親子記者］
［同行取材：山根親子記者］

松尾幸子さんから頂いたハガキ「ほほずき」

平和への思い

トラウマを越えて語る熱い思い

―原爆で亡くなった人達のために―

田川博康さん

長崎平和推進協会で、ご自身の被爆体験を語り継いでおられる田川博康さんにお話を伺いました。

当時12歳で、病院に運んだお父さんがノコギリで足を切断された後に亡くなり、自分を責め続けたそうです。お母さんの「大きくなってね」という遺言を胸に、力強く生きてこられましたが、原爆については家族にも語らずにきました。

しかし、65年後の看護師さんとの再会で、そのトラウマは溶け、一言も言えずに亡くなった人達の代わりに話すべきと思い立ち、語り始められました。

「一人ひとりが豊かさに負けず、平和について考え、学び、選ぶ力をつけることが平和に繋がる」という田川さんの教えをしっかり受けとめ、一人でも多くの人に伝えていきたいと思いました。

［記事執筆：出向井親子記者］
［同行取材：小池親子記者］

核兵器のない世界を目指して

―まず学んで、だれかに頼らない―

朝長万左男さん

私は、日赤長崎原爆病院名誉院長の朝長万左男さんに、今年7月7日に採択された核兵器禁止条約の話を聞きました。

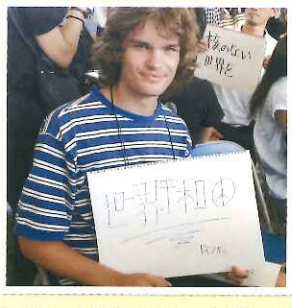
まず、原爆はプルトニウムでできていることや放射性物質について説明してくれました。核兵器保有国は9カ国、核弾頭は全世界に約14900発あり、その9割がアメリカとロシアが保有していると言っていました。

朝長さんは、核兵器禁止条約の話し合いの場で、長崎市を代表してスピーチを行った時のことを、写真を手に教えてくれました。

核兵器や戦争をなくすためには、「まず学んで、だれかに頼らず核兵器保有国の人達と話し合って、核兵器禁止条約を守ってもらうことが大切です」と教えてくれました。

私は、朝長さんの話を聞いて、核兵器のない世界になってほしいので、もっといろいろなことを学びたいと思いました。

［記事執筆：本田親子記者］
［同行取材：田口親子記者］



漢字で「世界平和」と書いてくださったドイツのアドさん
［梁澤 大翔・香代記者］

核のない平和な世界を願う、愛知県豊川市の田中昌之さん
［山崎 凌空・恵里記者］

ボランティアとして参加した長崎市の岩崎莉奈さんら
［鈴木 翔大・珠世記者］

「PEACE（平和）」と一言、カザフスタンのセミーさん
［小池 生吹・さや香記者］

平和へのメッセージ2017

長崎平和祈念式典には、世界各地からたくさんの人々が参列しました。参列者の方々のメッセージを紹介します。

世界に思いを伝えるために

―交流証言者としてのスタート―

今年「交流証言者」としてデビューされた松尾蘭子さんにお話を伺いました。

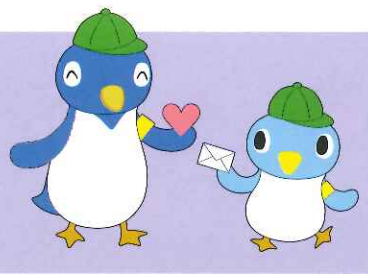
交流証言者とは、高齢になられた被爆者に代わって、体験談をお話しする人です。松尾さんは、以前からご縁のあった被爆者の山脇佳朗さんから、一年をかけて聞き取りを重ねてこられました。

松尾さんは、自らの体験のように話しながらも、感情が入りすぎないように注意しているそうです。

講話の中で「戦争が人生を狂わせてしまうこと、核兵器は他の兵器とは違い、放射線の影響は恐ろしいものだということを学び、知ってほしい」と訴えていました。私たち一人ひとりが、戦争がもし起こったら、どういうことが起こりうるかを想像することが大切だと感じました。

［記事執筆：橋本親子記者］
［同行取材：廣嶋親子記者］

松尾蘭子さん



語り継ぐ 世界に届け

今号はおやこ記者新聞 10回記念号です

今年のおやこ記者新聞は第10号の記念号となりました。創刊号から、全国97組194名のおやこ記者を長崎に迎えて、平和祈念式典や平和への取り組みを取材して新聞づくりをしてもらいました。親子記者が長崎で学んだ平和の種は、新聞を通してそれぞれの地域にまかれ、根づき、少しずつ平和の実として育っています。10年目を迎えたおやこ記者新聞は、長崎の思いを日本全国へ、世界へと、伝えつづけています。

10回記念エピソード ―その1―

6年前のおやこ記者体験が平和活動の原点です

おやこ記者新聞第4号で神奈川県鎌倉市から参加した佐藤ハンナさんが、今年編集部を訪れました。高校生になったハンナさんは、高校生1万人署名活動の派遣メンバーとして長崎入りしたそうです。6年前の親子記者の体験が、ハンナさんの平和活動の原点だと語ってくれました。

上　佐藤ハンナさん
下　6年前のハンナさん

10回記念エピソード ―その2―

私はなんと2回目の参加です！

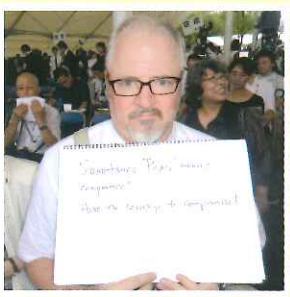
おやこ記者新聞第2号で参加した宮崎県日向市の三浦岳史さんは今年2回目の参加になります。2度参加した記者は、三浦さんが初めてです。前回は兄の巧明くん（当時2年生）と参加。今年は妹の世来さん（4年生）と参加しています。

親子記者の思い出

●宮崎県　三浦巧明・岳史記者

平和の鳩を取材して、初めて鳩に触った時は少し怖かったけど、羽がとても柔らかくて気持ちよかったです。平和市長会議では、沢山の市長さんに英語で質問してすごく緊張したけど、とっても楽しく取材することが出来ました。

ナガサキ・ピース・タイムズ第2号編集後記より


譲歩する勇気が平和には必要という静岡大学のシェフタル教授
［出向井 沙雪・彩記者］

「ことばの壁」を越えて世界中で被爆体験を語り継ぐ長谷邦彦さん
［廣嶋 佑人・亮太郎記者］

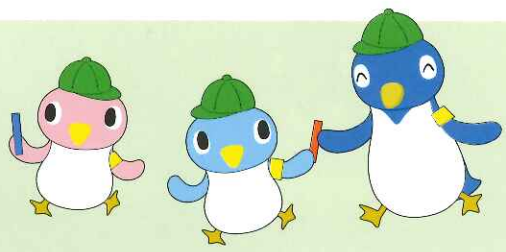
福島県から引地莉央さん・宍戸楓煌さん・早田怜生さんの3人
［手島 功遥・まり子記者］

「未来を一緒に創りましょう」と語る三鷹市長の清原慶子さん
［小出 健一・智子記者］

長崎から平和を祈る平田太亮さん、井上博数さん
［猪内 孔盟・勝利記者］

戦争反対、核兵器廃絶を訴える米ワシントンのカトリーナさん
［田口 愛・剛記者］

長崎とともに考えよう



私たちが伝えられること
―光岡さんが語ってくれた平和活動―

ナガサキ・ユース代表団の光岡華子（みつおかはなこ）さん（長崎大学4年）にお話を伺いました。

光岡さんは、マレーシアでのボランティアで現地の男の子の力になれなかったという体験や、周りの平和についての無関心という現状を変えたいとの思いから、ユース代表団になったそうです。ウィーンやニューヨークでの国際会議に参加した後、全国各地で、核兵器の現状や学生同士の意見交換を通して、平和授業「ピース・キャラバン」を行っています。

マレーシアでの体験について、「今の自分なら力になれますか」と問うと「自信を持って、なれるということは言えないが、その子が笑顔になるまで隣で寄り添うことはできる」と無力を感じた過去の自分との違いをはっきりと語ってくれました。

［記事執筆：辻親子記者］
［同行取材：鈴木親子記者］

光岡華子さん

みんなで平和を考える
―ゆずり合う気持ちが大切―

ぼくは、長崎市主催の「青少年ピースフォーラム」ボランティアの山下豊（やました ゆたか）さん（20）にお話を伺いました。このピースフォーラムは、北海道から沖縄まで、全国の青少年が長崎に集い、交流を深めながら、平和について考えるものです。山下さんは、学校の先生にすすめられてこのボランティアを始めたとのことです。

「国の話し合いで自己中心的な気持ちを持ってしまうと、武力を使うことになるので、話し合いをする国全部が『お先にどうぞ』という気持ちを持っていれば平和になる」という山下さんの考えにすごく納得しました。

今回、青少年ピースフォーラムを取材して、中高生の平和への考えを知る機会があることを知り、将来、ぜひぼくも参加したいなと思いました。

［記事執筆：鈴木親子記者］
［同行取材：辻親子記者］

山下豊さん

溝口祥帆さんと溝上大喜さん

「継承」と「拡散」
―私のできることを今!!―

第20代高校生平和大使の溝口祥帆（みぞぐち さちほ）さんと溝上大喜（みぞかみ だいき）さんにお話を伺いました。

私は2人に、次の世代の人に何を伝えたいか尋ねました。「被爆者の平均年齢が81歳を越えており、自分達の年代が最後の直接話を聞くことのできる世代と言われているので、聞いて学んだことを伝えていきたい」とのことです。私も、多くの人に伝えて、平和な世界を作りたいと思いました。

次に、普段から心掛けていることを伺いました。「ビリョクだけどムリョクじゃない」をスローガンにして一万人署名活動等をされているそうです。決して無力ではないと信じて平和の輪を広げていることを感じました。

私は、平和に対する思いがものすごく強くなり、多くの人に知ってもらいたい、そして平和な世界にしたいと思いました。

［記事執筆：三浦親子記者］
［同行取材：濱浪親子記者］

平和へのメッセージ2017

家族が大切だという長崎市の村山和人さん、素栄子さん夫妻
［山根 識結・健作記者］

戦争について学習し、式典を訪れた佐賀市の上松亮太さん
［濱浪 桂乃・真弓記者］

被爆者の遺族である永石珠江さん、埼玉県から式典に参列
［橋本 恵典・恵美子記者］

親が沖縄出身の新里ネリダさんはアルゼンチン代表として参列
［仲埜 清仁・陽一記者］

未来につなぐ 核兵器のない世界

72年前のあの日のこと、忘れんで

―「平和ば伝えたか」使命感じて―

小林裕美さん、田中蘭さん、村上文音さん

活水高校平和学習部の「ふりそでプロジェクト」と「長崎アーカイブプロジェクト」を担当する小林裕美さんと田中蘭さん、村上文音さんにお話を伺いました。

田中さんが担当するアーカイブプロジェクトでは、72年前の長崎の地図に、被爆された方々の証言を重ねて紹介しています。

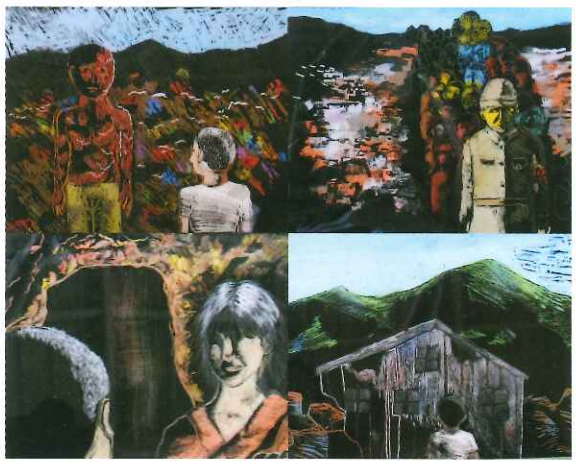
ふりそでプロジェクトは、小林さんと村上さんが担当。「ふりそでの少女」という絵本を多言語化し、朗読会を開いています。「これからは、動画を作ったり、原爆を知らない人達に長崎に来てもらったりして、72年前の『あの日』を、自分たちの言葉で伝えていきたい」と、強い気持ちで活動されています。

ぼくは、「長崎に生まれた者の使命として、平和を伝えていく」という三人の思いを忘れず、「ふりそでの少女」をこれからも読み続け、長崎のことや原爆のことを広め伝えていきます。

［記事執筆：小池親子記者］
［同行取材：出向井親子記者］

次世代が伝える平和の大切さ

―紙芝居で平和を伝える―



被爆体験を描く紙芝居を制作した長崎市立三川中学校の先生と生徒15名に、お話を伺いました。この紙芝居制作は、被爆者に代わって体験を伝えるために、今年初めて行われました。

被爆者の田川博康さん（84）の体験を元に、約1か月かけて、スクラッチ技法で原画を制作し、8月9日に全校生徒に発表しました。この後、物語が加えられて完成するそうです。

制作を担当した中学3年生の出口頌之さんは、「この紙芝居から、原爆の悲惨さ、平和の大切さを感じてもらえれば、作り手としてはうれしい」と話してくださいました。

戦争を起こさないためには、一人ひとりに戦争の恐ろしさを想像してもらうことが大切だと思いました。

［記事執筆：廣嶋親子記者］
［同行取材：橋本親子記者］

（注）スクラッチ技法とは　あらかじめ下塗りされた色の上に、違う色を重ね、その後上の色を引っかいてけずり取り、下の層の色を出す絵画技法のことです。

核兵器のない未来

―被爆地の「理」忘れずに―

吉田文彦さん

「被爆地の『理』を忘れないようにしている」。そう語るのは、長崎大学核兵器廃絶研究センターの副センター長、吉田文彦さんです。その役割は、核兵器がなくても平和を維持できる方法などを世界に発信することです。吉田さんは、解決方法をケンカに例えるなど、分かりやすく説明してくれました。

吉田さんの言う「理」という言葉は、「理性」「真理」という大切な意味を表しているそうです。

このような平和に対する吉田さんの考えを聞いて、ぼくは核兵器のない世界の平和や核戦争のない未来があるためにどのようなことをすればいいかを考えていきたいです。

［記事執筆：手島親子記者］
［同行取材：山田親子記者］

「平和を友情と共有から見出して」とアメリカのマイケルさん
［山田 太智・和歌奈記者］

核のない世界を願うスペイン・バスク地方のマリアさんら
［本田 いち花・静江記者］

広島県から高校生平和大使として訪れた船井さんと小林さん、久永さん（左から）
［三浦 世来・岳史記者］

核反対の思いを伝える東京都の八木初音さん
［辻 ひより・義之記者］

全国18組36名の親子記者が、生まれ育った地域を取材しました

戦争が終わって72年目の夏。私たちのふるさとで調べて知った“戦争”と学んだ“平和”

1945(昭和20)年8月9日の原爆投下の日から、長崎は72年目の夏を迎えました。今年で10年目を迎えた、日本非核宣言自治体協議会(非核協)主催のおやこ記者事業には、全国から177組の応募があり、抽選で選ばれた18組36名が参加することになりました。

おやこ記者のみなさんは、長崎での取材に先がけて、それぞれの地域で「平和」について事前取材をしました。今回は次の4つのテーマからひとつを選択し、記事にまとめています。

1）戦争を体験したかたに話を聞いて考えたこと
2）あなたの住む地域にある平和資料館等を訪ねて学んだこと
3）あなたの住む地域で平和を伝える活動をしている人に会って学んだこと
4）家族で考えた「平和」について

北海道大樹町　鈴木翔大・珠世 記者

祖父から聞いた北海道空襲

ぼくは、戦争のことが知りたくて、祖父（渡部奨さん）に話をしてもらいました。

祖父は昭和20年7月15日の北海道空襲について話してくれました。祖父の住んでいた広尾町には、15日に釧路の方から海岸線を一気にものすごい数の戦闘機が列を作って飛来し、焼夷弾の雨を降らせました。焼夷弾が落ちてきた所は、次々に火の海になっていったそうです。

ぼくは北海道に空襲があったとは知らなかったので、びっくりしています。祖父から話を聞いて、戦争によって人の命や大切な物が失われることを改めて理解しました。戦争は絶対にいけません。

祖父(渡部奨さん　写真右)から話を聞く

大樹町旭浜に一列に並ぶトーチカ群

北海道旭川市　小池生吹・さや香 記者

平和の願いを問う

ぼくは、戦中の暮らしについて、旭川市の岡本保さんにお話を聞かせてもらいました。

昭和19年、岡本さんが旧制中学4年(現在の高校1年)の時、勤労動員で、同市から150キロはなれた丸頼布町で夏は農家の手伝いへ行き、冬は毎日重い木を切り倒して運びました。特に雪がふっている時の作業が一番辛かったそうです。泊まる場所も、すきま風の入る木の小屋ですごく寒かったそうです。

そして、夜はランプの下で自分のためでなく、国のために役に立つ人間になるように、一生懸命勉強することが日常でした。

そして岡本さんは、平和な戦争のない暮らしを守るために、一人ひとりが、具体的に何ができるのか、もっともっとよく考えて、平和を守るための行動を維持していくことが大切だと、教えて下さいました。

ぼくは、お話を聞いて、平和について長崎やたくさんの街で見聞きして、広め伝え、しっかり守っていきたいと思います。

旭川市の岡本保さん(右)

山形県米沢市　梁澤大翔・香代 記者

日本一小さな資料館にて

「日本一小さな資料館」で、理事長の遠藤宏三さん、学芸員の阿部宇洋さんからお話を伺いました。

とても貴重な「特高警察講義要綱」という資料もあり、戦時中の警察の取り締まり方などが書かれていました。

遠藤理事長の父・太郎さんの戦時中の配給品も展示していました。その中に「コンパス」がありました。「このコンパスで多くの命が失われた」と遠藤理事長が教えてくれました。見方を少しでも間違ってしまうと敵地に入り命を落とすことになるそうです。戦時中の残酷さを感じました。

遠藤さん達は戦争があったという事実を風化させないように、今でも小学校に出向いて子供達に伝え続けています。

理事長の遠藤宏三さん

「日本一小さな資料館」の展示を見学

宮城県美里町　山崎凌空・恵里 記者

仙台空襲から学んだこと

ぼくたちは、戦争を知るために「仙台市戦災復興記念館」を尋ねました。「仙台戦災復興と平和を語り継ぐ会」の方から、お話を聞くことができました。

ぼくたちの住む宮城県にも空襲で被害があったことを初めて知りました。昭和20年7月10日、約2時間にわたって仙台市内に焼夷弾が落とされ、約1600人が亡くなり、500へクタール(東京ドーム約107個分)が焼け、一晩で焼野原になったそうです。

「70年が過ぎて、やっと当時のことを語れるようになった」という言葉が、とても重みがあり、戦争が終わっても悲しい想いは消えることなく、今でも苦しみ続けている方がたくさんいる……。だから世界中に戦争は、絶対あってはいけないと強く感じました。

展示物を見学しました

空襲被害について学びました

福島県いわき市　田口愛・剛 記者

小学校を襲った空爆

私の住んでいる市の小学校に爆弾が落とされたとは……。まさかの思いで、いわき市立平第一小学校の伊達多津也校長にお話を伺いました。

昭和20年7月26日午前9時ごろ、校舎に1トンの爆弾が落とされました。当日登校していた児童は校長先生の判断で臨時休校となり全員無事。しかし、校長先生と2名の先生が亡くなりました。後に学校に×印のついた米軍の航空写真が見つかり、原爆模擬爆弾だったことが判明しているそうです。

空襲から生徒を守った3人の先生方を称えた殉職碑に手を合わせながら、私は戦争を知り、伝える夏にしたいと思いました。

お話を伺った伊達多津也校長（左）

殉職碑

群馬県高崎市　猪内孔盟・勝利 記者

戦争は二度と繰り返してはならない

朗読劇で平和の大切さを伝える「高崎夏の会」所属で、ぼくの元担任の西川むつ美先生に話を伺いました。「高崎夏の会」は、今年で発足10年目になります。西川先生は「戦争の悲しさや辛さを伝えることで、一人ひとりが平和について考えてもらえたら」という思いで活動をされています。

さらに曽祖母（荒木わか子さん）から昭和20年8月14日の高崎空襲の話を聞きました。曽祖母の家は焼夷弾により全焼し、辺りは人が焦げる匂いと焼けた木材の残骸ばかりだったそうです。曽祖母の「あの地獄のような生活は誰にも味わわせたくない」という言葉が深く胸に残りました。

西川むつ美先生（右）に話を聞きました

体験談を話してくれた曽祖母（荒木わか子さん）

東京都三鷹市　小出健一・智子 記者

昭和館で防空壕体験

ぼくは、九段下にある「昭和館」に行きました。

戦時中の写真やその当時の暮らしの展示もありました。その中で防空壕の体験ができたことで、戦争の怖さを初めて知りました。

カーテンを閉めた暗い中で爆弾の音がなり、せまく、中がまっ暗というだけでも本当に怖かったです。空襲警報がなり毎回防空壕に入ることを考えると、つらかっただろうなと思いました。

今回、東京にも、爆弾が落とされたことを知ることができました。

爆弾が落とされた写真などを見て、二度と戦争はしてはいけないと感じました。また今の生活が平和であることを知ることができました。

昭和館

防空壕について学びました

新潟県新潟市　手島功遥・まり子 記者

祖父の戦友が語る「No more war」

亡くなったぼくのおじいちゃん（手島修さん）と戦争をともにした石山茂さんにインタビューをしました。その時に聞いた言葉に感動しました。

それは「No more war」です。これが石山茂さんの平和へのメッセージです。家で調べたら「もう戦争はイヤだ」という意味でした。

その内容は「戦争は二度としてはいけない」。「一緒に突撃訓練をした仲間がどんどんいなくなっていくことが一番つらい」という言葉が、ぼくには印象に残っています。

この話を聞いて、戦争は何があっても、どんな理由があったとしても二度としてはいけないと思いました。

石山茂さん（右）に話を聞きました

静岡県三島市　廣嶋佑人・亮太郎 記者

郷土資料館で学んだ平和

三島の戦跡を調べるため、郷土資料館を訪ね、学芸員の福田淑子さんからお話を伺いました。

そこで、いつも通っている小学校は、戦時中、陸軍の訓練場があった場所だということを知りました。その軍隊は中国大陸や東南アジアに行き、多くの方が、現地で戦闘や病気で亡くなったそうです。その戦没者を供養する慰霊碑が、街のあちこちに立っていることも知りました。

戦争をしてもいいことは何もなく、傷つける方も傷つけられる方も、どちらもとてもつらく悲しい思いをするのだということを感じ、二度と繰り返さないようにしないといけないと思いました。

陸軍の訓練場跡

平和の碑

大阪府八尾市　出向井沙雪・彩 記者

八尾の戦争の痕跡を調べて

八尾市には、八尾空港（元陸軍の大正飛行場）があります。今回調査してみて、普段使っている近所の道路が、その予備滑走路だったと初めて知って驚きました。

また、府内で唯一現存していると言われる掩体壕があります。地元の方のお話によると、当時大阪市内まで10以上は造られており、実際は飛行機があると見せかけるだけのものでしたが、空襲はとても激しかったそうです。

曽祖父（竹田豊治さん）からは、中国に出兵した時に飛行機からの銃撃を受けて、慌てて列車の下に隠れて怖い思いをしたという話も聞きました。

今の平和な青空を守り続けるために、私はもっと戦争の恐ろしさを学ぼうと思っています。

掩体壕跡

曽祖父（竹田豊治さん）に話を聞きました

地域を取材しました

全国から18組のおやこ記者が長崎に集まりました

兵庫県宝塚市　仲埜清仁・陽一 記者

宝塚聖天の光明殿

宝塚市で学んだ戦争と平和

ぼくは、宝塚聖天を訪問しました。

このお寺にある光明殿には、特別攻撃（特攻）で亡くなられた兵士の遺品や遺書が展示されています。勇ましい特攻隊の写真が並んでいましたが、その遺書には、家族や両親、これから生まれてくる子供への愛情や感謝の気持ちが書かれていました。

宝塚市には、戦争中に宝塚歌劇場が接収されるなどして、約4000人の少年兵が訓練する海軍の航空隊がつくられました。

また、阪神競馬場の辺りには、川西航空機の工場があり、昭和20年7月の大きな空襲で100人以上の人が亡くなりました。

ぼくは、大切な人を離れ離れにしてしまう戦争の恐ろしさと、平和の大切さを感じました。

広島県東広島市　濱浪桂乃・真弓 記者

広島と長崎に投下された原子爆弾の模型

広島の原爆について改めて学んだこと

私は、広島市にある広島平和記念資料館で原爆について調べました。

昭和20年8月6日、午前8時15分に、アメリカは世界で初めて、広島市に原子爆弾を落としました。

投下から43秒後、地上から600mで爆発し、その年の終わりまでに14万人という尊い命が奪われました。

その後も後障害で亡くなった人が大勢います。その中のひとりに佐々木貞子さんという人がいました。

佐々木さんは被爆から9年後に白血病になり、回復を願って折り鶴を折り続けましたが、8か月後に亡くなりました。それをきっかけに「原爆の子の像」が完成したそうです。

私は二度とこんなことがないよう平和を伝えていきたいです。

オバマ元大統領が折った折り鶴

岡山県岡山市　橋本恵典・恵美子 記者

写真を前に説明する片山和良さん（左）

岡山空襲の記憶

岡山市は空襲のあった（昭和20年）6月29日を「岡山市平和の日」と宣言しています。

戦争遺跡の写真展をしている片山和良さんに話を伺いました。片山さんは戦争遺跡のガイドもしています。「戦争の爪跡を写真に残していくことで戦争に触れ、平和を願う気持ちを持ち続けてほしい」と願い活動されています。

ぼくが通う小学校の裏山の斜面に防空壕が残っていること、普段遊んでいる公園や神社にも焼夷弾が落とされた跡があることを知り、改めて戦争について気づかされました。

この平和な生活を守るために、戦争は二度とあってはならないと強く感じました。

焼夷弾が落とされた跡のある神社

高知県高知市　辻ひより・義之 記者

戦争は絶対にだめだ!『ガラスのうさぎ』を読んで

「これは昔からある戦争の本だよ」と言って、母が『ガラスのうさぎ』をすすめてくれました。

本の中でお母さんと妹達が空襲によって行方不明になり、その後お父さんも機銃掃射で亡くなるところが地獄絵図のようで、心に残りました。

私も登場人物の敏子と同じように、あの世で皆と幸せに暮らしたいと、自ら死を選んでしまうかもしれません。しかし、祖母を亡くした時のことを思い出し、「どんなにつらいことがあっても死んではダメ。亡き人たちの幸せのためにも絶対に死んじゃダメ」と心の中で言いました。

私は戦争を知りません。父母も祖父母も知りません。しかし、世界で唯一原子爆弾を落とされた国に生きる人間として、本当にあったことを知り、戦争は絶対にダメだという強い意志を持つことが大切だと感じました。

『ガラスのうさぎ』の読書中です

香川県高松市　山根識結・健作 記者

高松空襲について説明を聞きました

深夜に襲った高松空襲

ぼくは、たかまつミライエ（高松市こども未来館）の中にある平和記念館へ行き、高松空襲について調べました。

昭和20年7月4日未明、アメリカ軍のB29爆撃機は、高松市の町を焼き尽くしました。116機の爆撃機で、1時間46分の間に840トンの爆弾を落とし、亡くなった方は1240人にのぼりました。B29が落とした爆弾は「焼夷弾」です。焼夷弾の中には、鉄製の筒が何本も入っています。その筒の中に油を入れて、木造建築がほとんどだった高松市の建物を焼き尽くしたのです。

最後に、人を傷つけ悲しませる戦争や核兵器は、絶対この世界から無くすべきだと心から思いました。

焼夷弾を見学しました

全国18組36名の親子記者が生まれ育った

宮崎県日向市　三浦世来・岳史 記者

もう一つの特攻「回天」を訪ねて

緒方博文さん（左）の説明を聞く

私は、日向市で戦争遺跡の調査・保存活動をしている緒方博文さんの案内で、日向市細島地区の外れにある船大工小屋跡の裏山へ行き、「回天」の格納跡を訪ねました。

回天とは、爆薬を積んだ潜水艇に兵隊さんが乗り、大きな戦艦にぶつかって爆発させる兵器です。一人の犠牲で、大勢の相手を殺せると聞いて、とても恐ろしいことだなと思いました。でも回天は使われることがなく、一人も犠牲にならなかったと聞いて良かったなと思いました。そして回天は、戦争が終わった時に、全て解体されたそうです。

私は、皆がよく話し合って仲良くして、平和な世界と未来になってほしいと思いました。

「回天」の説明板の前で

沖縄県豊見城市　本田いち花・静江 記者

平和祈念公園・平和の礎を訪ねて

平和の礎

7月9日、糸満市摩文仁にある平和祈念公園・平和の礎に行きました。平和の礎には、沖縄戦で亡くなった20万人以上の名前が刻銘されています。

取材当日も、ご先祖様に花を手向けて祈っている人がいました。私も、祖父の兄の刻銘の前でお祈りしました。

祖父の兄の刻銘の前で祈りました

刻銘碑の中に、戦争中に生まれ、名前を付けてもらえないまま亡くなったため「○○の子」「○○の次男」と刻銘されているところがありました。せっかく生まれたのに名前をもらえずに亡くなっているので、かわいそうだなと思いました。これからも「二度と戦争がおきませんように」と強く思いました。

沖縄県石垣市　山田太智・和歌奈 記者

波照間島の忘勿石（わすれるなかれいし）

『忘れな石』の絵本を読みました

ぼくの住んでいる沖縄県では、地上戦、空襲、艦砲射撃、マラリアで、住民、軍人などに大きな被害が出ました。

八重山諸島の波照間島の島民は、日本軍の強制疎開により、西表島南風見では人口の3分の1の人々がマラリアでなくなりました。南風見の海岸の岩の上には、当時の国民学校の識名信升校長が書いたとされる「忘勿石（わすれるなかれいし）ハテルマシキナ」という文字が刻まれています。

戦争は多くの命をうばいます。戦争による体や心の傷をかかえている人もいます。

ぼくは平和が大切だと思います。平和な世の中は、みんなが仲良くし、協力し合えばいつかはできることだと思います。

いろんな本を調べ、平和について考えました

事務局だより

被爆地の平和への取り組みを全国へ広め、核兵器廃絶と平和への願いを若い世代へ伝えるため、平成20年にスタートした「おやこ記者新聞」は、記念の第10号を迎えることができました。

これまで取材に応じていただいた皆様、100組近い親子記者、会員自治体、紙面づくりに協力いただいた大学生及びボランティアスタッフの皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。

被爆72年を迎えた長崎で、18組の親子記者は、取材を通して、自らの目で見、耳で聴き、心で感じる大切さを実感することができました。

本紙を読んでいただいた皆様が、平和のバトンをつないでいただくことを願っています。

学生ボランティア23名がおやこ記者を全力サポート!!

今年も、長崎県立大学シーボルト校情報メディア学科・国際社会学科の金村ゼミ生23名が、学生ボランティアとして、おやこ記者18組の取材と記事作成、編集をサポートしていただきました。

- ♥平和とは何か改めて考えることができました ＝上田　悠加＝
- ♥お互いを理解し尊重する事が平和を築く第一歩となる ＝鬼塚　桃子＝
- ♥伝える活動を続けることが大切だと思った ＝國頭　岬＝
- ♥学ぶだけでなく伝えることも大事 ＝國生　茉由＝
- ♥親子と取材して私自身も貴重な経験となりました ＝武田　真依＝
- ♥今できること、やるべきことは何か考える機会になった ＝寺園　未希
- ♥核への理解を深めることができました。 ＝徳峰　理恵＝
- ♥平和の想いを次の世代に伝えていきたいです ＝中道理紗子＝
- ♥親子の方と深く平和について考えることができた ＝野口　里穂＝
- ♥平和への考えや思いを深める機会を頂きました ＝林田　葵＝
- ♥子どもたちから、自ら知っていこうとする姿勢の大切さを学んだ ＝倉富　美優＝
- ♥次に平和を守るのは私たちの世代なのだと感じました ＝長尾　瑞希＝
- ♥今ある平和が当たり前なものではないと改めて感じた ＝山崎　優＝
- ♥多くの平和への想いに触れる機会となりました ＝伊東　美奈＝
- ♥平和への思いを繋いでいきたいと思いました ＝稲田　菜那＝
- ♥次世代へ繋がる場に立ち会う、貴重な経験ができました ＝内田　千裕＝
- ♥平和を伝えていくことの大切さを改めて実感しました ＝川添　友香＝
- ♥「平和」という言葉への思いが強くなりました ＝木須　萌奈未＝
- ♥核のない世界を目指したいと改めて感じました ＝仙崎美佳里＝
- ♥子供達が一生懸命取材をする姿が印象的でした ＝廣庭　佳奈＝
- ♥私たちの意思で戦争のない未来を作れると知った ＝山崎　千尋＝
- ♥平和な世界は私たち大学生でも作れると思いました ＝岩本英利子＝
- ♠改めて平和について考えるきっかけになりました ＝東谷　大夢＝

編集後記

北海道 旭川市　小池 生吹・さや香 記者

ふりそでの少女に導かれて

「ふりそでの少女」の話を知り、長崎をもっと深く知りたいと思いました。彼女たちに導かれるように、長崎に来られたことを感謝しています。母親として、たくさんの子達や家族の命が一度に奪われたあの日が、二度と繰り返されぬよう、安心して暮らせる毎日を守っていきます。

北海道 大樹町　鈴木 翔大・珠世 記者

自分からつくる平和

ぼくは今まで、戦争について、平和についてあまり考えたことがありませんでした。長崎に来て、最後の被爆地にしたい、世界を平和にしたいという強い思いを感じることができました。北海道に帰ってみんなに長崎のことを伝えて、ぼくから平和にしていきたいです。

宮城県 美里町　山崎 凌空・恵里 記者

平和を伝えていきたい

ぼくは、長崎に来る前までは、戦争や原爆のことを全く知りませんでした。

ドイツの市長さんや、防空ごうの取材をしました。

平和祈念式典に参加して、最後の被爆地は長崎であってほしいと思いました。

宮城県に帰ったら、友達に体験したことを伝えたいです。来年の平和祈念式典に向けて、みんなでつるを折って届けたいです。

山形県 米沢市　梁澤 大翔・香代 記者

夏の思い出

ぼくは、最初知らない人ばかりの環境で、すごく緊張しました。でも、話ができる友達ができたので、うれしかったです。親子記者は、思った以上に大変だったけど、みんなのサポートのおかげで、楽しい夏休みの思い出になりました。

福島県 いわき市　田口 愛・剛 記者

平和の大切さ

今回親子記者を経験して原爆の恐ろしさと戦争の悲惨さを知りました。忘れ去られ、風化させないためにも未来に語りついでいくことが大切だと感じました。

世界中の人に長崎を訪れてもらい、「長崎が最後の被爆地に」なるようにと強く思いました。

群馬県 高崎市　猪内 孔盟・勝利 記者

平和の伝道師に

ぼくは、日常で平和について考える機会がなかったので、長崎に行けて良かったです。長崎では、国連の中満さんの「平和は自分で作っていく」という言葉が心に残りました。

この4日間で、平和について色々なことが学べたので、友達にも伝えたいです。

東京都 三鷹市　小出 健一・智子 記者

平和の大切さを知りました

ぼくは、平和の大切さを知りました。72年前、原ばくが落とされた日、みんなが水をほしがりました。それほどあつかったという気持ちが伝わってきます。折り鶴は平和をねがって折ったんだなと感じました。戦争は、やってはいけないことがわかりました。平和は大切だよとみんなに伝えたいです。

新潟県 新潟市　手島 功遥・まり子 記者

戦争の恐ろしさを学びました

この4日間で学んだことは2つあります。1つ目は平和の大切さです。被爆者の方のお話で、どれだけの人が犠牲になったのかを聞いて驚きました。2つ目は「核はあってはならない」ということです。長崎や広島で起きたことを忘れないようにしていくことが大切だと思いました。

ぼくも平和活動の一員として誰かに伝えていきたいです。

静岡県 三島市　廣嶋 佑人・亮太郎 記者

伝えていく平和

長崎に来るまでは、ほとんど戦争も原爆も考えたことがありませんでした。

取材で見た紙芝居で、実際の情景を想像することができ、戦争がとても恐ろしいと感じました。

今回学んだことを、友達や身近な人に伝えていきたいと思います。

大阪府 八尾市　出向井 沙雪・彩 記者

親子で学んだ長崎発の平和

今回多くの方の協力で、記事を書けました。私も協力できる人になりたいです。学校で平和について広めたいと思います。（沙雪）

平和活動に携わる方の生の声や記者仲間に刺激を受け、一生モノの貴重な経験となり、感謝です。親子で伝えることで恩返しします。（彩）

兵庫県 宝塚市　仲埜 清仁・陽一 記者

広めたい平和の想い

ぼくは、国連の中満さんとイギリスのマンチェスター市長に取材したことが、一番印象に残りました。お二人の話を聞いて、今まで知らなかったことや考えていなかったことにたくさん気付きました。ぼくは、長崎で学んだ平和の大切さを宝塚でも広めたいと思います。

岡山県 岡山市　橋本 恵典・恵美子 記者

平和への道

ぼくは、初めて原爆について学びました。戦争の苦しさをいろいろな方法で伝えていました。中には、紙しばいを使っている中学生や、原爆にあった方にお話を聞き、その人の代わりに思いをつなげる人もいました。

友達にも平和の大切さを教えてあげたいと思います。

広島県 東広島市　濱浪 桂乃・真弓 記者

もう一つの爆心地で感じたこと

私達親子は広島在住なので原爆や戦争について触れる機会は都度あります。

今回初めて平和祈念式典に参列させていただき、会場の雰囲気に改めて平和の尊さを感じました。広島に戻ってからも引き続き平和について学んでいきたいと思います。

香川県 高松市　山根 識結・健作 記者

長崎に来て、気付いたこと

ぼくは、今まで平和について深く考えたことがありませんでした。

平和祈念式典に参列して、平和な世界をつくるために、核兵器根絶が不可欠であると分かりました。

世界中には核兵器がたくさんあります。それがなくなるまで、しっかりと行動していきたいです。

高知県 高知市　辻 ひより・義之 記者

長崎で学んだ平和

私は、原子爆弾と言えば広島というイメージだったけれど、長崎の爆弾の方が大きいし、今と昔では爆弾の数がまったく違い、今の方が多いことが分かりました。

これを通して、もっと多くの平和学習をして、戦争と平和を学んで伝えていきたいです。

宮崎県 日向市　三浦 世来・岳史 記者

取材で学んだこと

平和についての思いや、次世代へ伝えていく勇気をものすごく感じたし、文章にまとめるのも、ものすごくむずかしかったです。でも、みんなで協力して新聞が作れたので、とってもうれしかったです。平和や戦争についてあらためて勉強して、昔のことが分かりました。

沖縄県 石垣市　山田 太智・和歌奈 記者

4日間の取材を終え

今回ぼくは親子記者として長崎に来ました。長崎は石垣より大きな街があり、おどろきの連続でした。

しかし、72年前ここに原爆が落ち、多くの人が亡くなったと思うと悲しいです。運よく無事だった人もすごくつらく、悲しいことがあったと思います。

これからは核がなくなり、被爆者も安心できる平和な世界になるといいと思います。

沖縄県 豊見城市　本田 いち花・静江 記者

平和な世界へ

私は、この4日間で、平和の大切さを知りました。沖縄の戦争とはちがって、たった一発の原爆でたくさんの人がなくなっていたので、沖縄の地上戦とはちがう怖さでした。とてもおどろきました。

これからは、長崎で学んだことをみんなに伝え、平和な世界にしたいです。